

日本語学習者における格助詞および文法要素の習得過程と誤用分析:ブリーフィング文書

エグゼクティブ・サマリー

本報告書は、ベトナム、ネパール、韓国、中国などの異なる母語を持つ日本語学習者を対象とした、格助詞(特に「に」「で」「を」)および主要な文法項目の習得過程と誤用傾向を分析したものである。調査の結果、学習者の母語の言語的特性(母語干渉)や、習得の過渡期における特定の学習ストラテジーが、誤用の発生に深く関与していることが明らかになった。主な知見は以下の通りである。

- 習得モデルの提唱: ベトナム人学習者の調査により、格助詞の習得は「名詞ピボットスキーマ」から「格助詞+動詞のピボットスキーマ」を経て、動詞に基づいた「アイテムベース構文」へと段階的に発展するという仮説が立てられた。
- 母語の干渉(負の転移): ネパール人学習者は、母語において主語・目的語が無標(後置詞がつかない)であることが多いため、「は」「が」「を」の欠落が顕著である。韓国語学習者や中国語学習者においても、母語の助詞や構造との類似性・相違性に起因する「負の転移」が見られる。
- 学習ストラテジーと化石化: 特定の助詞と名詞をセットで覚える「ユニット形成」や、複雑な丁寧形体系を単純化しようとする「んです」の過剰般化などの戦略が見られる。また、滞日歴が長い上級学習者であっても、特定の誤用が「化石化」し、訂正されずに残る傾向がある。

1. ベトナム人日本語学習者における場所格助詞の習得過程

ベトナム語を母語とする学習者にとって、日本語特有の格助詞習得は極めて困難な課題である。特に場所を表す「に」「で」「を」の使い分けにおいて、顕著な習得段階が見られる。

1.1 習得の3段階モデル

Tomaselloの使用基盤モデルやPienemannの言語処理可能性理論に基づき、以下の3段階のプロセスが提示されている。

- 「名詞+格助詞」のピボットスキーマ(句レベル処理): 言語能力が低い段階では、後続の動詞ではなく、前接する名詞の意味特性(位置、地名、建物など)に着目して助詞を選択する。
- 例:「上に」や「図書館で」といった固まりを形成し、動詞に関わらず助詞を決定する。
- 「格助詞+動詞」のピボットスキーマ(過渡期): 動詞に注目し始めるが、動詞と項の統語的關係(格役割)を理解できていない段階。特定の動詞と助詞をセット(一語化)として記憶する。
- 例:「～を降りる」「～に乗る」「～にある」といった固定的なスキーマを使用し、文脈に応じた使い分けができない。
- アイテムベース構文(文レベル処理): 動詞を中心に構文を形成し、各項の格役割を判断して正しく格助詞を選択できる段階。格助詞が統語標識として機能し始める。

1.2 知覚面の問題

音声面では、北部方言話者を中心に「ヤ行・ザ行・ジャ行」の混同が見られる。

- 語内位置の影響: 「ヤ」は語頭で、「ジャ・ジョ」は語中で知覚されやすい。
- 後続母音の影響: 母音「ウ」が後続する場合、各行とも比較的正しく知覚されやすい傾向がある。

2. ネパール人日本語学習者における助詞の欠落と取り違え

ネパール人学習者の初級段階では、文法上の誤用の大半が格助詞および取り立て助詞に関連している。

2.1 助詞の欠落要因

「は」「が」「を」の欠落が最も多い。これはネパール語の文法的特徴に起因する。

- ゼロ格の存在：ネパール語では主語や直接目的語に後置詞を付加しない(無標)が多いため、その習慣が日本語産出時に転移し、助詞の欠落を招く。
- 格成分と余剰成分：統語上不可欠な「格成分(が、を)」の欠落は、文の成立に必須ではない「余剰成分(に、で)」の欠落よりも顕著である。

2.2 統語レベルと談話レベルの不一致

助詞の取り違え(例:「は」を用いるべきところで「が」を使用)の分析によれば、学習者は統語レベル(主語・目的語の判定)では正しく格を付与できているが、談話レベル(主題化の「は」の適用)での操作に失敗している。これは、異なる言語領域の接点における習得の困難さを示唆している。

3. 韓国人日本語学習者の誤用と学習ストラテジー

韓国語は日本語と文法・語彙面で共通点が多いが、その類似性がかえって誤用の原因となる「負の転移」を引き起こす。

3.1 典型的な負の転移

- 助詞のずれ：韓国語では「友達を会う(만나다)」「タクシーを乗る(타다)」のように、日本語の「に」に相当する箇所に対格(を)を用いる動詞があるため、「友達を会って」といった誤用が生じる。
- 動詞の選択：韓国語の「보다(見る)」が「会う」の意味を含むため、「妹をよく見ません」といった不自然な表現が産出される。

3.2 体系の単純化ストラテジー(「んです」の多用)

中上級学習者において、説明のモダリティ「のだ(んです)」の過剰般化が見られる。

- 原因：日本語の丁寧形体系(です・ます、品詞ごとの活用)は複雑である。学習者は、用言の基本形に「んです」を付けるだけで丁寧形にできるという簡潔な形式を、体系の単純化のために利用している可能性がある。

4. 中国人日本語学習者における誤用の化石化と傾向

上級レベルや博士論文執筆段階の学習者であっても、特定の誤用が消滅せずに固定化する「化石化」が報告されている。

4.1 博士論文に見られる誤用項目

中国人学習者の学術論文における誤用は、単なる不注意ではなく、中間言語としての化石化が原因である。

- 主要な誤用範疇：接続、テンス・アスペクト、ヴォイス、ムード、コロケーション、主述呼応、「は／が」の使い分け、形式名詞、指示詞、漢語の誤用など。
- 逆接の誤用：意味関係が逆接であるべき箇所では順接の従属節を使用するなどの論理構造の誤りが見られる。

4.2 形容詞の連体修飾(「な」と「の」)

ナ形容詞(形容動詞)と名詞の区別において、母語の助詞「的」の影響(母語干渉)による混乱が見られる。

- 「の」の過剰使用: 「偉大な」とすべきを「偉大の」とするなど、中国語の構造を日本語に当てはめる傾向がある。
- 「ゆれ」と許容: 「最高な」「満席な」のように、母語話者の間でも使用に「ゆれ」がある項目については、学習者が周囲の母語話者の言語使用に影響を受けている可能性もある。

5. 共通して見られる誤用のパターンと指導への示唆

異なる母語を持つ学習者間で共通して観察される誤用のパターンとその分析に基づく指導のヒントを整理する。

5.1 共通の誤用パターン(表形式)

誤用例,正用,推定される要因

試験を合格する,試験に合格する,「合格する」を他動詞と誤認、または「試験を」をユニットとして記憶。

ホテルで泊まる,ホテルに泊まる,動作の場所と存在の場所の混同。

友達を会う,友達に会う,母語(韓国語・中国語等)の格支配からの負の転移。

緊張感いっぱいな空間,緊張感いっぱいの空間,名詞とナ形容詞の判別困難、または母語話者の「ゆれ」の影響。

5.2 指導上のポイント

1. 動詞と格助詞のセット指導: 助詞を単独で教えるのではなく、動詞の格役割とセットで「接着剤」として導入することが、誤用防止に有効である(例:「に」入る → 「で」行為する → 「を」出る)。
2. 気づきの機会の提供: 特に「んです」の多用や、中上級者の化石化した誤用に対しては、学習者が自身の出力と目標言語の規範との差を認識できるようなフィードバックが必要である。
3. 母語の特性を考慮したアプローチ: ネパール人の「欠落」や韓国人の「負の転移」など、母語背景に応じた重点指導項目を設定することが望ましい。